特集

南海地震に備えて

3月11日、日本を震撼させる大地震が起こった。
東日本大震災は、30年以内に60％程度の確率で起こるといわれている南海地震を想像させた。
必ず起こるといわれている大地震に対し、私たちは何をすればよいのだろうか―

香美市消防隊員が派遣された岩手県大船渡市（3月16日撮影）

頼りになるのは 日ごろの絆（きずな）、住民自治

市役所では、大規模災害時における職員の対応方法や心構えについて研修を行いました。研修で、県中央東福祉保健所田上所長に話していただいた内容を紹介します。

私は、3月31日から4月6日まで、高知県災害派遣チームの一員として、宮城県南三陸町での支援活動を行いました。

被災地では、さまざまな需要と供給のミスマッチングが起きており、支援物資の供給も混乱していました。

そんな中、住民組織が、支援物資の供給で大きな役割を果たしており、まとまりのある地域には物資がスムーズに支給されていました。

また、避難所は自主運営されており、食事作り・掃除・介護予防など、多くのことは自助・共助で行われていました。避難所は一つの町のようなもので、区長・班長を決めて動きます。南三陸町では、こうした普段からの自治組織が災害時に大きな力になっていました。

大規模災害ではライフラインの復旧が大きく遅れるため、飲料水の確保などについては、集落単位でいざというとき、どうするか決めておく必要があります。

南三陸町では、井戸がある家が水を用意し、かまどのある家で米を炊いて、おにぎりを配るなど、地域の底力を感じました。

このように、頼りになるのは、**日ごろの絆、住民自治であり、逃げるための自主防災、逃げた後の自主防災**が必要となります。

中央東福祉保健所
所長 田上豊資（たがみ とよし）さん

被災地から学ぶ

東日本大震災の被災地に派遣され、救援活動を行った市職員の、体験談を掲載します。

●岩手県大船渡市へ　３／１４～２１（香美市消防署・消防隊員）

被災地では、避難所で生活をしている方々の救急搬送を行いました。近隣で唯一の医療機関も次第に受け入れ困難となり、県外への転院搬送は数時間かかり、救急隊の重要性が身にしみました。

今回の災害で感じたことは、対策に万全はないということです。ひとつずつ不安要因を消していく必要があると感じました。

大半を山間部が占める香美市では、土砂崩れ等による孤立集落へのアクセスや救援物資の搬送など、課題は多く山積しています。

また、高知市内の大きな病院への搬送が困難となることが想定され、地元の医療機関との連携が重要であると思われます。

「天災は忘れた頃にやって来る」という言葉があるように、この災害を風化させてはなりません。いつ起こるか分からない南海地震に備え、今できる最善を尽くす必要があると思います。

今回の東日本大震災でも同様ですが、危険を承知で避難誘導の放送をし続けた役場の職員の方や、近隣住人を助けた方がいたように、「香美市も地域住民が連携を深め、今以上に防災意識を高めていかなければならない」と感じました。

●岡田匡史（左）・大野大介（中）・鍋島安明（右）（消防署）。緊急消防援助隊の高知県隊の一員として、岩手県大船渡市に派遣され、香美市の救急車で移動し、３月１７日～１９日までの３日間、被災地で救急活動を行った。

●宮城県南三陸町へ　５／２５～３１、６／２９～７／５（健康介護支援課・保健師）

被災地の状況を実際に見て、あまりの被害のすごさに絶句しました。それとは対照的に、被災者の方々の力強さや、心の優しさにふれたときは感動しました。全国各地からの救援物資や人的支援の多さには驚きましたが、その中でも人の絆の大切さを感じました。有事だからこそ強く感じた絆なのかもしれませんが、普段も意識しないだけで、私たちは多くの人の支えがあってこそ生活できているのだと思います。私は保健師として人と人をつなぐ仕事をさせてもらっているので、今後はより一層“つなぐ”ことを意識して職務に励もうと思いました。

災害時に大切なことは、人と人のつながりだと思います。市民の皆さんには、普段からのご近所同士のあいさつなどを通してつながりを意識していただけたらなと思います。（杉原）

出発前は、「自分に何ができるのだろう」と思っていましたが、実際に被災地に行くと、支援活動はたくさんあり、優先順位を考えながら活動しないと、時間が足らないような状況でした。

多くの被災者が、自分の思っていることを誰にも伝えられず、被災時の様子や家族のこと、これからの生活の不安などを話したい状況でした。

災害には震災・水害・火災などがありますが、それぞれの状態を想定しての日ごろの訓練が必要だと思います。避難ルートの想定や、災害時に何を持っていくか、誰に声をかけるかは重要です。治療している病気がある方は、どのような薬を使っているのかを自分や家族が知っておくと、医療機関が機能しなくなっても、避難所などの巡回診療などで、比較的スムーズに治療が再開できるようです。（田中）

●杉原里恵（左）・田中令奈（右）（健康介護支援課・保健師）。高知県保健師派遣チームの一員として、宮城県南三陸町に派遣され、杉原は５月２６日～３０日、田中は６月３０日～７月４日の間、被災地で避難所や仮設住宅を訪問した。